

戦争と平和と

読谷中学校 三年 神谷 麗菜

あれは、四年前の八月十五日のことです。友達と遊んで家に帰るとテレビがついていて、夕方のニュースが流れていました。

「終戦」という文字と流れた白黒の映像。銃の音、爆発した音が鳴り響く戦場。倒れる人、戦車などが、映っては消え、映っては消え。その映像に、何かにとらわれたように見入っていました。立ったまま何も言えずに。

そのとき、戦争はなんで起きるんだろう、とふと思っただけです。

その頃の私は、戦争について、「恐いし、起こらない方がいいしな」と思っていました。でも、中学生になって、始めて真剣に思っただけです。

戦争の本当の恐ろしさは戦争の最中だけではありません。その後も、人々に恐怖を植えつけていくのです。

私には、九十代の祖母がいます。単純に考

えて、祖母が戦争を体験したのは三十代。三十代なら、何か戦争についての事を覚えてい  
ると思つて、祖母にその時の事を聞こうとし  
ていました。

ですが、母に止められたのです。あの時の  
ことは今でも覚えています。母が私に、「お  
ばあちゃんに、戦争の話はしないで」と言っ  
たのです。私は不思議に思いました。これは  
勉強の一環で、悪いことじゃないのに。それ  
なのに、どうして止められるんだらう」と。

そんな私の心情を見ぬいたのか、母は言い  
ました。

「戦争を体験していいかわからないと思  
うけど、戦争を体験した人は、とても辛い思  
いをしてきたんだから、興味ほんいで聞くの  
はやめなさい」。

私は何も言えなくなりました。母の言葉が  
ま、たくその通りだったからです。

私は何も知らないのです。戦争の現場を映  
像で見ると、そんな気分になっただけ。体験し

た人たちの思いを、哀しみを、怒りを、絶望を、辛さを知らず、ただ少しの興味だけでそれをほり返す子供でした。私はそれから、戦争の話をするのをひかえるようになりました。そして中学校になって、平和学習も本格的なものになり、今まで知らなかった沖縄返環や、屈辱の日なども知りました。でも、今でも、戦争を体験した人たちの思いは、その辛さ、悲しさはわかりません。多分、一生わかんないのでしょう。

平和な世に生まれ、戦争を知らない私たち。それでも、できることはあります。戦争の恐ろしさを、人と人との争いを、今でも苦しんでいる人たちの事を、平和のすばらしさを、私たちは伝えることができますのです。私は、あの時の気持ちを忘れず、本当の平和を目指していきたいと思います。